北越略風土記

七

和書 類 二九二七五 號 二一二 函 九八 架 冊

内閣文庫 和書 類 二九二七五 號 一七五 函 四 架 九 冊
(七冊)

地 四八

内閣文庫		
番號	和 29275	
冊數	9 (7)	
函號	175	70

内 一〇九八四號

北越略風土記巻七

七奇之譚

崑崙主人曰北越奇談ニ云当國ニ古ヨリ七不思議と称ふる物あり今猶諸方の遊客好事者尋来て其奇を探らんとす然るに諸説紛々として更に実事をしらず近世諸家の紀行に載る者其名号今別異にして論説すゝ處も又同からすしかも風俗の容民間或ハ駅亭の主に就て詢訊せるよし誤り傳へし惜むへし爰に土俗下愚の輩ハ只生國を妄に誇といひつ唯に雑記紀行にあぐる所と國人家々に論説する所と合せ見るに今尚二十有四奇あり所謂神楽嶽の神嶽の神楽海鳴七ッ法師八ッ瀧白兎鎌鼬火井塩井燃氷冬雷蓑虫火逆竹風穴沸壺白螺土用清水四盞波

北越略風土記巻ノ七

箭振石　三度栗　無縫塔　沖題目　八房梅　即身仏等なり　桜なる
に日本書紀の二説を本として享徳乃頃好事の人七奇を
撰ひしなれは其時世なる足利義政将軍の頃にして風流好
奇今時の泰平にはおとらされともさはりありしは永く
此国の勝奇とあり諸家の記録にも載せ公聴にも入
ましく古へはいまた諸国の奇事名勝穿鑿の至らさりし
も今は太平永く續き士は君恩に飽き民は稼穡に富て
道に閑多きに乗し四方を遊歴し勝を尋ね奇を探り
家に在ては山林を手け水脈を通し田野を開き天
化も又盛にして五日十日の風雨時を違へす草木
長し百穀みのりて熱国なるは却て涼しく寒国なるは更に
暖なり於是諸州の産物奇勝其数出来てその甚しき多
く仍て古の七奇今他方に同物ありて聞民間の

蒙俗他の同気に対して七奇の名をかき飛んと
欲するゆへ是を減し彼を増して終に二十餘奇の
孟浪に及へり

古乃七奇

燃土　頸城郡片町の辺り鵜ノ池朝日ノ池同郡梼崎に
裏田の沼より出又三島郡竹森の用水溜池及ひ田の沼
より出る其外所々に多し是所謂桑田江海の変上古
の竹根木葉深く落重なりて数千歳を積て泥土の如く
なりし物なれは是を田家にて人切りとりて日に乾し焚く時
はよく燃る今猶江州栗本郡武佐石部二村の辺信州に
も出西国にもありといへり然れとも人皇三十九代天智
帝七年戊辰秋七月越後国献燃土與燃水と日本
書紀に見へたれは古上既に当国に其一奇として出せ

と明かなり
因云橘茂世北越奇談云日本書紀人皇三十九代天
智帝七年戊辰五月越國進水土可代薪油者云々
此語日本紀不見之何以筆写恐杜撰矣 本朝通記
曰冬五月越國献可代油薪之水土 九山元純云燃土
蒲原郡の内に多し水田沼を堀通し三四五尺に底
に至り色甚だ黒く其体萱の葉芦荻なとの根茎朽
腐せしかしやすり合て土となりたるもののことく見へたる
かしき所を鋤の類の刃物にて切起し水和して
ゆるき所を手にて握りかためて日に干して焚に能
燃るなり薪として売て利とす是を焚に臭気烈しく
人の衣に移り立居近もいむなり 又よく乾きたる
を床の下に敷て湿を除くなと炭に亜といへり○江
州老曽村にてもゝもといへる物を地中より堀出す
同類なり

燃水

臭水油あり蒲原郡吉川庄草生津村同郡新津村
柄目木村黒川館村より出又頸城郡に六ヶ所三島郡出雲
崎の南地蔵といふ所海中に出如此所々水中より油交
りて沸出るに草にてこゝみ汲取るといふなる油といふて扱
さて此臭水の臭きがゆへに臭水の油と称するなり和漢三
才圖會云石脳油出於越後村上近處山麓黒川村與泉
水相雜而汪汪而出土人覆屋於上以草挹入缶中多取
之燃燈甚明其臭如硫黄気故俗曰臭水油 博物志
曰石泉脂石漆本草曰石脳油石油山油酉陽雑記曰
石脂水といふなり皆此類なり今本邦の醫家是を石脳油
に當て用るに甚だ効ありといへり猶水部に委し

崑崙氏云是又燃土のごとく數百年前松柏なる古木大材土中に落入たる松脂の腐水と覚ゆるなく其故は甚だ油烟多く松の匂ひあり殊に北越は上古より山谷水土の變化ありしにや所々水底沼田の下に多く埋木ならび大なる物を出せる事計りなし近来圓淨湖なる底樋堀替の節數大なる土中より立木のまゝなる埋木數十本を出せし或人云松脂は茯苓となり琥珀となる何れも油となるなる理あらん是は只土中の油なるべしと崑崙主人其説を難破して曰松脂其樹より自然に滴り落て土中に凝塊するものの化して茯苓琥珀ともなるなるべし是ハ土中に含みたる松脂にして水土の底に腐爛せるものなるべし只土中自然の油といふべけれ暗愚の説といふべし云々　准南子曰千年松下有茯苓典術曰松脂入地千歳爲茯苓

白兎

諸州にありといへども他邦の白兎ハ則其質によりて生ずるより白く冬夏相同し當國に産する所は春の末より秋の終りまでは茶く灰毛色にして冬ハ則清白の雪の凝りたるが如し寛永年中古志郡の内より黒頭の白兎を出せし事あり近世に至り奥州信州加州越中佐州なとにも白兎ありといへども然ども年代実記云宝亀五甲寅八年従越後献白兎とあれバ當國他州に先立て奇と称せる事明らかなり

事類合璧云兎大如貍而毛褐形如鼠而尾短耳大而鋭上唇缺而無脾長鬚而前足短尻有九孔趺居趫捷善走雄毫而孕五月而吐子〇爾雅云兎生子従口吐出云々　丸山元純曰今當國にて兎の孕るを見るに臍の辺の皮肉

於外に薄皮にて生し其處に孕む子四ッ五ッあり産る時彼皮破れて出る其痕を見るに乳汁を通する穴あり此を以て是を見れは口より子を吐出すといふハいひかたし又其尿色も赤く血の如しといへり 宗奭曰兎者明月之精有白毛者得金之気入薬尤効凡兎ノ色至秋深時可食金気全也至春夏則味変矣 寺島氏曰兎善走如飛而登山則愈速下山則稍遅所以前足短也毎雖熟睡不閉眼黒睛瞭然 河州専教寺了貞二十四輩順拝圖會云下越後於辺雪中に白き兎多く徘徊せり其色白玉の如し白雪の色に感してなれるなるへしといへり 宋史云王者徳盛則赤兎見王者敬耆老則白兎見然今奢兎有之北國之兎白者多称越後兎青形小而実白可愛毎食蔬穀而能馴 壽帯之兎性狭而難馴 見和漢三才図會

因云燃土燃水白兎の三奇今猶蒲州に同類出ることゝともに證書明らかなることを以て他邦の産も悉く越後に餘流といふなるへしと崑崙云

海鳴

晴天といへとも雨ふらんとする時海潮の響き五六里に聞ゆる事あり又風雨の日も晴んとする時は北に聞ゆ國人是を以て陰晴を占ふ按するに數十里の海潮大山に挿む所にて潮水の差引直流するとはいへとも相戦て其響となせるなるへし 今九州灘に是に類する所ありといへり然れとも当國其奇先達てあるよし好事者有九州灘の中にも聞出せりと覚也まく又陰晴に其気自然し南北ある事北越の海に限ることいへり故に以て音とす享徳年間の旧記に其奇と載たり

胴鳴　秋晴の日風雨なくしてある時是を聞くたとへば雲中より雷の声きこへ落るかごとく又雪の高山より落るかごとき声ありといへども定かならず頸城郡にては黒姫山といひ古志蒲原辺にては宇門嶽粟ヶ嶽とし又磐舟郡にては村上の外道山といへり其響更に遠近なし今は其奇称に聞事なし但し蒲原郡鎧潟辺黒鳥村二三里の方は今猶其鳴動ありて其方角黒鳥八幡の社地なりといへり　東鑑八巻曰文治四年五月一日酉刻鎌倉乾方成響是若魂打欤非雷声恒聞不及云々

俗諺曰むかし奥州阿部の族徒黒鳥兵衛当国に徘徊し八幡太郎義家加茂次郎義綱の為に討せられし其頭と胴と両所にわけて埋みしに其胴其頭と合せんと欲しくて其鳴動をなすといへり是童蒙の口舌に傳へて称する所万犬実に傳ふるゆゑん一笑すべし然れどもまた黒鳥村の人は前々より更に其鳴動を聞ことなし他に出る時は即ち是を聞く一奇也

崑崙云近頃丙寅の秋（文化三年）米山より西北の海辺にて聞し其山の鳴ものは海潮の響ならん地に接して其鳴動をなす是を以按するに頸城郡の海は能州の北涯とむかひ佐州の南浦とむかひて大洋数千里の海潮ここに的する所なれば其響きをなす是即ち数百里の外に風雨ありし起る時は其気海上をさり地に徹接する所即ち其地気を押し山谷に徹して鳴動す凡気を以て気を製する事しては其理なし

てまさに風ならんとする時は窓戸なども鳴り雨ならん
とする時は煤埃自然に落つ頭かゆく気欝し魚踊りて
猫兒なども狂ふ是自然なりして其気より押至るもの
く決すしもは晴て波静なる折すれは浦に鳴動せる時は必
ず風雨あり胴鳴といへるは胴に響きて鳴り故に名付
しものならん其義を以擦せるは當國にのみ限らい
八方にあらし他邦いかにし穿鑿の至らさる所か地勢によ
る歟黒鳥共一奇歟

無縫塔

蒲原郡河内谷陽谷寺の門外渓流數十尋の淵
廻りて百歩もあらんの間岸辺する乱石扇落たり其寺
住僧入寂三年前に必ず其淵より暮所の嘉なりしとなん
せる石ならびに岸上に揚る事之其石常躰の石とも異なる
るすれはあふれてし自然にして未住の人誰いふとなく
是を無縫塔といひ衆目のさしれ所皆同し其奇いふなりと
わも量もすし一下度着人の名付るより其石幾度淵に
投入すれは一夜にして又元の所にあり付置し先年住職の
和尚其石を渕に投入て曰我大願ありといひて死去しなる
れはしく其場より寺をも出して再びなれ帰らずなりしに余ゑ
なく長壽せしといひて予近ころ其所に至りて寺の墳
墓を見るに（形）既に其石十四五並へあり
因云信州四部の温泉寺にも其奇ありて水底より
無縫塔の形を作りなしてあがるといへり

火井

蒲原郡三条の南一里ばかり山の麓入方寺村（如法寺村）
又妙法寺村ともいふ　農家の炉の角に石臼を置其穴に竹をさし火
をかざせば即聲ありて火うつり盛に燃りさしと尺を
すりもあれん縦横に竹を組上たれは其竹の穴ごとに皆

火燃る之竹を少し引上れバ火中(ナカバ)央絶て上にもゆる也
盛んなり是土中より發する氣のもゆるなるべし一說に硫
黃の氣といへども悉くハ不是硫黃ハ即ち火遠く土中に
入て地中も又燃るなりしかれ共臭水油の氣なるべし

同郡栖目木にもほりて入方寺に同じ火部に出す

三島郡寺泊大和田山の間少しの水溜りありて冷水なれ
ども常に湯の沸がごとく泡立てあり是に火をちかづくれバ
忽ち燃るなり

古志郡杉尾郷比禮といふ所の山澤より水に火をちかづければ
水上に火燃るなり

同郡見附川舟渡しある所の川原の所に管をさし火を
ちかづくれバ幾所も燃て絶ず

魚沼郡一ノ宮村山澗の溪流に火をうつせバ三尺もあり

ありて火をもやして其所にも多くあり

頸城郡上野尾原谷間より風の出る洞ありて火をうつ
せバ忽ち空中に火燃る事車輪の如し

同郡吉村大瀧氏近来井を掘しに烟草の吹がらより火移
りて井中高く燃り數日消ず甚だ奇なり

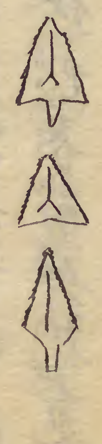
長久保子玉云越後有二七奇一唯火井山油足二以為一レ奇
常州水府赤水主人云一奇を以て甚だ賞せり即ち琅琊
代醉の火井の說とおなじ又大明一統志の蜀地雲南
有二火井一不レ過二二三所一云々

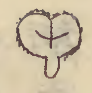
因云赤水主人云火井を稱して陰火にあらずして陽火
になりといへり崑崙氏是を難じて曰硫黃の火
を以て是に移せバ即ち燃る是陽火に非ずして何
ぞや若陰火ならバ陽火にあふ時ハ忽ち消るもの

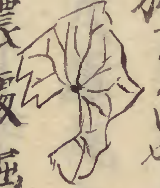
く赤水の論誤之云し

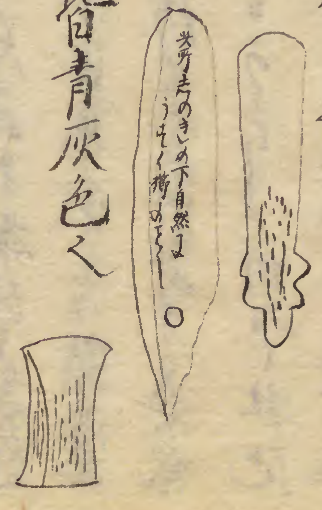
俗傳十七奇

神楽嶽　蒲原郡神楽嶽〈津川の里より東南五里許〉み絶頂に方一丈五六尺の平面の巖あり静夜にを尖岩の上すゝく御神楽を奏せる音きこゆといへり

箭根石〈石鏃なり〉　北越所々山中并古社地古城蹟畑なとにあり頚城郡にては大光寺村山畑神田山蒲原郡にハ圓浄湖の北高ヶ入村渡邉村長者ヶ岡三島郡竹森村の古社地にあり又雪中に土の内より飛び放て竹木に鑿立事あり又伊夜日子山下麓村の畑黒瀧の古城址等にあり其形種々ありて雁(カリ)股(マタ)尖(トガリ)平根鏑(カブラ)なと上品なるものハ瑩青黒皆玉の如く淺黄赤斑のものもあり甚尖にして込(コミ)も長し大なるハ七八寸なるもあれと事甚々稀にて二三四寸に至るもの又稀に多くハ一寸斗りにて其形は

崑崙云ふ山の西北土底村海辺沙山の間に小池あり尖所甚だ多し小童等日々其辺拾ひ尽して帰るといへども翌朝まては元のごとし予一とせ其奇を試んとて彼地に至り小童等を伴ひ池の辺にて石鏃五つ六つを拾ひて翌朝未明に又独行して其所に至り見るに早くして三ッ四ッ得たり其中半鏃形なしてまだ全くならぬものあり又水底に石屑(クヅ)ありて皆一片々に割飛なるものもあり何分し社地なと地中より飛放て人にあたりそのもあれと敢て損傷に及ばず又頚城郡関山驛民家の婦女戸外に出て浴湯したりしに山中より何くともなく矢響きして盥の中に飛入たり女驚き是を見ましたれバ大なる箭の根

石くりしより七寸斗りありしを俗云神軍に空中より降り
下るものなりとて土産にはなしとなりて總て北越山家にて
ハ二月十五日十八日に山神祭とて山に入らず若誤りて登
山する時ハ必ず種々の怪を見て病となる
霹靂碪 俗に石鉞雷の太鼓の撥(バチ)と云
霹靂楔 俗に大勾玉鬼の手形と云
雷斧石 俗に狐のまさかりと云 其品多く出 皆青灰色なり
天狗の飯櫂(メシガヒ)  赤黒石なり
本綱白伺候震處掘地三尺得之其形非一有似斧刀者
剉刀者有安二孔者出雷州並河東山澤間因雷震後得
者多似斧色青黒斑文至硬如玉 博物志云人間往々見
細石形如小斧名霹靂斧一名霹靂楔○陳時蘇紹雷鎚
重九斤宋時沈括于震木之下得雷楔似斧而無孔鬼



神之道幽微誠不可究極 劉恂嶺表錄曰雷州驟雨後人
于野中得石如黳石謂之雷公墨扣之錚然光瑩可愛 崑
崙曰霹靂石形不一 黒青色真黒色漆黒白点等也甚光
彩潤澤明徹如玉 俗に落星石星銷石と云 今信州佐州其
餘所々山中にありて北越最多し 空中大陽の気欝結し
て忽ち光彩を發し飛去る物地上に落ちしハ即化して石
となるなり其火光大なる物を俗に光り物と云 小なるを流星と
云 春秋左傳に星隕如雨とハの火光之豈真星ならんや
日本紀曰人皇四十代天武帝白鳳十三年十一月戊辰昏
時七星倶流東北則隕之 庚午日没時星隕東方大如瓮
逮于戌時天文悉乱以星隕如雨 續日本紀云承和六年
出羽國より申せし八月廿九日田河郡西濱符と達せる
所五十餘里の間允より石なりし去ル十三日雷雨甚しく

十餘日を歴て晴天を見る後落たる石少しありける鏃に似
鉾に似たり石或ハ白く或ハ赤しと云し」三代実録云
仁和元年六月廿一日出羽國秋田城及飽海(アクミ)郡神宮之
西濱石鏃を降らせ同二年同國同郡荒神社邊石
鏃を降せし」丸山氏云羽州飽海郡大物忌大神凡一年
一度神軍有テ暴風雨震ヒ降ル鏃後尋テ求ム之ヲ有リ數品

鎌鼬

時所定まらす杜地なと過る者不慮に面部手足
の皮肉さしさけたるはきずみなく大なる金瘡の如く
なる疵出来少し淡血汁流れしさみ痛もなし
帷子袷もの類は裁裂て刃物にて斬たるか如し人是に逢
ま鎌鼬にかけられしといひて麻口白くなせのみ何者
の所為といふ事を志らす眼にさへぎる物なし瓢水伽
婢子云女粧草を揉て付れハ一夜に愈るといふ又古き

暦を黒焼にして貼れハ熱も散し疾愈る 或人云鬼神の
刃に行当り其觸る所其奇をなす故に構太刀と云」
二十四輩順拝圖會云北越の僻地常に天狗の群集して
合戦をなし侍るに人の目には見へけるなり天狗の
構へたる太刀に觸れ疵付しゆへに構太刀といふなる
らんとなまり鎌鼬といふ志からむや否云し」名所方角
集云風なりし其風にあたりても鎌にて切られたる如くに疵を
受けしと云し」崑崙云鬼神の刃に觸ると其説當れりとい
ふ風きたれ凡鬼神は北方陰分の地に集り艮(ウシトラ)を鬼門
とあれハ是になりてか北越は鬼神の奇甚多し然
るにまた天地の気長し人気満てるに随て自然と幽
冥に帰したりしと覚ゆ四五十年以前迄ハ其奇多かりし
も今は稀にある事ゆへ弥彦より國上へかけ越ゆ所黒坂

といふあり此所まてあやまりて顚倒者甚ダ此奇とて愛く又一説ニ寒気皮膚の間ニ凝封せられてしらく暖を得る時ニ其皮肉さけ其気発するといへり是医家の説なるべし左ありても飛信の二州奥白川の辺ハ極冷なる地高なる所にして寒気北越ニ倍せざるに此奇却りて甚しからすといふ一 寺島之蝦夷松前臘月厳寒而晴天有ニ凶気一行人逢レ之者卒然倒仆其頭面或手足五六寸許被レ剖俗謂ニ之鎌閉太知一然無レ至レ死者一急用ニ蕨薇汁一傅レ之愈痕如ニ金瘡一也津軽地所レ有之蓋極寒陰毒也 見ニ三才圖繪颶下一

四蓋波　頸城郡名立駅の下鍋が浦にあり旧跡部に委し

冬雷　北海気候の逆にして南國に異なる事是に限らず先南方ハ梅ハ正月に開き北國ハ三月にいたる東南の水仙ハ冬専ら是を愛し北越ハ翌二月に漸く咲くなり是皆陰陽遅速の同じからざるがゆへなり

三度栗　蒲原郡保田村孝順寺にあり親鸞聖人の旧跡なり佛閣部に委し

沖の題目　蒲原郡角田濱海上にあり日蓮上人の旧跡なり佛閣部に委く出せ

沸壺　蒲原郡柄目木村十丁ばかり隔てて山の尾上丘の引廻りたる所にあり水部に委し

塩井　三島郡与板の西南山の中塩入村古志郎朽尾の東山中塩中村蒲原郡下條等其外所々にあり水部に委し

逆竹　蒲原郡鳥屋野村西方寺にあり親鸞聖人の旧跡なり佛閣部に委し

即身仏　三島郡野積村西生寺弘智法印の肉骨え仏閣部
に委し
七ッ法師八ッ瀧　頸城郡難波山にあり八ッ時未日輪西に
旋る頃ともしなれて瀧白く見へけるが七ッ時申に至りしが
其瀧の中央黒く法師の形顕然としてて出づ尖邊更に
其影をなす岩などもなし　しかして然れども西國影向
瀧に不動尊の形ありもあれども遠近の峯高樹の影
なし相映して其形をなすなるべし
因云妙高山に二月の頃雪の消えるには山の字を
顕はせし又糸魚川の辺に牛形あり是も雪解の頃
黒く山畔に見ゆるえ即大石ありて残雪の中に先
つ頭をなせり
八房梅　蒲原郡小島村善照寺にあり親鸞聖人の旧跡

あり佛閣部に委し
風洞　蒲原郡國上山弥陀堂の後にあり仏閣部に委し
簑虫火　何ましの所とも限らず細雨蕭條たる夜簑笠に
て独り道する時忽然としして簑毛に螢火の如く光く
く火部に委し
土用清水　古志郡長岡新宮蒼紫明神の山下中澤村にあり水
部に委し
白田螺　諏門嶽の北の山足芦ヶ平村より一里餘山へ登り大
木茂りし山間に大池真菰池鰌池として底しらぬ池
三ッあり爰に生ずる田螺色白く美へ岸に這ひ出し
篠竹茶るとに取付て居るを物の音あれば せぎるやう
にして捕るべし少しも物音きこゆれば水底へ轉び入るべし
つきてを捕得て大旱の節雨を乞村里へ持來るに降

ふらそといふをかへし雨を得て又本の池へ返し放川く自
然あやまつて放せば天矢ひなとしく返さんとせしかども
彼池大に荒て洪水し麓なる芦ケ平甚だ難儀に及し彷
て他方の人至て求むれども村民敢てゆるさず今も
なし又谷より是山神の惜む所なりとて山大に荒六月に雪
を降し風雨洪水あるゆへに樵夫も恐れて容易に至らず
も今も他所の人に池を見する事なるにゆるさず殊
に深山なれども不知案内にして行ときは盗のより彼村に
一身の青を誘し拵て見物に至るとし又何になりとも
池に非常の事あれば山鳴り谷応して荒ること甚し

東都桃陽井俳諧所名集の七奇　燃水　火井　鎌鼬
逆竹　八房梅　三度栗　浪の題目

御巡見使の節水原郡中より書上七奇　燃水　火井
神楽嶽御神楽　八ッ成瀧　七ッ法師　燃土　海鳴

崑崙北越奇談所載新撰七奇　燃土　燃水　火井　胴鳴
無縫塔　石鏃　鎌鼬

異物之部

翠鷹　蒲原郡奥山庄聖籠の松原に往昔百合若大臣
の愛せしみどりまると云鷹の棲しと申傳へし古老
の松の大樹あり今未領主より垣結廻し厳重に側に当
國順礼廿九番の札所の観音堂あり別当も松原の
山足諏訪山村にありて鷹尾山観音寺と称し密宗
なりて寺領五十石あり　俗傳曰人皇五十二代嵯峨
帝御宇昔日豊後國有百合若麿人勇力俊傑且善
射或時奉勅假賜大臣號伐蒙古賊繫船於玄海島
待順風時熟睡三月三夜於家僕別府兄弟変心

棄之帰國偽曰百合若戦死其妻甚悲之放所養鷹至玄海島百合若見鷹足着書嚙指血書于瓶紙着鷹頭放之鷹還故郷妻得之知夫存在焉而遇漁舟適来還國討別府兄弟以下賊臣云〻」三十九代天智天皇欲平新羅弟集四国九州之兵於是百合若又従余出陣者乎而其軍不到新羅而止〇百合若麿所持鐵弓納備前國岡山石楯酒折社未知然由来人不能引之以為奇寛文年中同國武臣有射場藤太夫者強弓鳴于世於是試引之而不為難且挽折之納云〻見和漢三才図繪　扶桑十夷傳八巻

有飼鳥渡海慕主君之故事

駿馬生食

蒲原郡弥彦庄通曽村より出しなり　古昔より國倍に申傳ふ　人皇八十二代後鳥羽院御宇木曽義仲追討の節頼朝卿より佐々木四郎高綱に賜てり元暦元年正月廿日宇治川を渡し先陣の功名を顕しある名馬なりし　鎌倉実録云生食元来奥州雄葉より出海道太郎業衡か後家徳尼子より治承の始め鎌倉再興の時引るし　兵馬須城の使官森川氏は江州の産なりしと云寺島良安云河内牧方の産といふ

狒々

人皇百十三代霊源院御宇天和三癸亥年二月二日須城郡栗取谷へ猛獣出て跳り走り中ノ俣村の農民吉十郎か噬殺し其外人馬を害すること甚し仍て官家より足軽五十人村民数百人をもつて郡中の山々谷々駈させし同年六月廿五日といふ所にて鳥銃をもつて打殺せり其状身の丈四尺八寸鼻先より耳迄一尺八寸牙上下共に八寸足三尺毛の長サ五寸色赤黒し俗狒々

といふ本綱云狒々出西南夷状如人被髪迅走食
人人面長唇黒身有毛反踵見人則笑笑則上唇掩目大
者長丈餘俗呼為山都宋建武年中獠人進雌雄二頭其
面似人紅赤色毛似獼猴有尾能人言如鳥聲善知生
死力負千鈞反踵無膝睡則倚物獲人則先笑而後食之
獵人因以竹筒貫臂誘之俟其笑時抽手以錐釘其唇
著額候死而取之髪極長可為頭髢血堪染靴及緋飲之
使人見鬼也　和漢三才圖會云獣莫仁於麟莫猛於
狻猊獅子莫巨於猰貐頭長尺莫速於角端日行一万八千里莫力
於蠻蠻莫悪於窮奇食善人不食悪人　和漢合運曰天和三癸
亥年六月越後國桑取谷狒々獣出其形大四尺八寸耳
五寸眼三寸目廻光如日自鼻端至耳一尺八寸口両方
一尺六寸牙上下共八寸爪五寸足長三尺八寸太本一

尺五寸圍尾一尺五寸其色赤黒色以鉄炮殺焉

吉右衛門狐

蒲原郡押付村に稲荷明神あり社殿の下に
狐の住居せる穴あり常にかの小狐出て遊ひ戯れ居たりと
いへとも人とも恐れ犬なとも取らす更にかまはすして追て
す元禄の頃のことかや矢村の農民吉右衛門といふ者春の
雪も消たれは折ふし畑に出て蓑笠をかけてつよめぬきし捨置
り畝作り耕しけるにいつくよりとも知れす尾頭斗も白
き老狐身をこはしめて走り来るゆへ吉右衛門驚きしつゝ
見れは大鷲一ッ矢をはなしてかゝるに飛来るなるやと見る
うち彼老狐ハ吉右衛門か捨置たる簑笠の下に身を隠
せりかゝる所に折しも田畠にありける若者共是を見て狐
をとし鍬鋤をふりかざし追来るに是を鷲も狐を見失ひ
人々の騒ぎしまゝや驚きけんたちまちに天涯に飛去りた

り扠若者共集りて老狐を殺んとし罵るを吉右エ門深く
是を憐ミ酒一升を約して終に若者共を帰らしめ
彼老狐を簑に包ミ己か家に帰りて食物なと与へける
に其老狐吉右エ門か方をさるも其折〻奇異の事あり
吉右エ門家貧くして一年味噌の大豆を煮る事あたはす
家内うれへて悲しみけるに翌朝起出て見れは味噌大豆を
煮て丸めける玉といくつかその家の中にみちてありける吉右
衛門驚きし近隣に告しかは同村本念寺（西本願寺派）にて
貴ふる味噌を悉く盗まれてありしといふ吉右エ門大に
怒り是必定老狐の所為ならん早く寺へ返すへしと
申付しかは其夜の内に残らす運ひ返しぬ又ある夕
暮近所なる曽根町の穏婆(トリアゲババ)か家へ吉右エ門か使ひありしと
て頼ミ来りやかて婆を伴ひ行しか早速出産して婆

婆ハ家路に帰りぬ老婆か賎息(セガレ)是をきゝて如何難産にて行
しに左なくして早くも帰りけるそといひけれは姥か曰往
来にも人に背負れしかはいかにしたるの心地せりと語るか
に衣服ミな土塵にまみれてあり賎息ハあやしみ外面に
出て見れは綿布一反あり猶以て心を得すて明るを待吉
右エ門か許へ行て如何のよしを語るに産婦なし彼狐
の産にてこの綿布ハ禮謝なりけり○其餘吉右エ門訴訟の
事ありて出入に勝し諸又三國峠にて盗賊に出合非力の
吉右エ門自然に術を得て賊徒五人打伏せし訳て童男
童女の口占に委し是皆老狐の利験なるへし○祈願
ある者彼社前に赤小豆飯油煮豆腐を供物にそなへ
帰りて翌朝行て社頭を拝すれは所願の成就
すへきは其供物を食ひ尽し不成の願にはそのまゝ

食されし事なりし別して盗賊の為に失ひし物を祈るに十に八九ハ不出といふ事なし 享保五戌年の事とかや吉右衛門か弟に僧ありて新潟善導寺に居ましか一年京都に上る故ありて吉田二位大納言殿へ参り物語りし待りけれハ是より稲荷の神職に達し易からぬ事く眷屬にせんとして頭して轉任の書下り頂戴ありけれハ小祠を造立あり同十九寅年山州稲荷の使者に召呼有しけるよし申伝ふるなり

青山狐

蒲原郡新潟の辺所山に棲みて人に妖をなし名におふ老狐あり赤沙日村庄屋藤次左衛門か妹(バカ)されし事あまねく人口に膾炙せし 本綱曰狐北方最多有黄黒白三種白色者尤稀尾有白錢文者亦佳其腹毛純白謂之狐白或云狐至百歳禮北斗変為男婦以惑人又能撃尾以出火千年老狐以千年古木燃照則見真形云々 山海経云青丘之山有狐九尾能食人 寺島良安曰本朝狐諸國有之唯四國無之耳凡狐多壽経數百歳者倉稲魂之神使也天下狐悉参仕洛之稲荷社矣人建稲荷祠而祭狐其所祭者位異于他狐患則声如兒啼喜則聲如壺敲性畏犬若犬逐之窘迫必屁其気悪臭而犬亦不能近之将為妖必戴髑髏拝北斗則化為人惑人報仇亦能謝恩好小豆飯油熬物 玄中記曰狐五十歳能変化百歳為美女為神巫為丈夫與女子交接千歳能知千里外事即與天通為天狐

川童

三島郡西越庄島崎村の民家農馬を野飼にし放ち置けるに常なりとも逸足にて家路に走り帰

り厩に入りけしかは是を断きしかも責て見ましき攅伏て
戸取綱の端其下に行たり槽を引起せは河童その細
を體に随ひ隠すし居たり時に同村の栗原嘉右衛門と
いふ者其席に居合せしに強力なる男なれは河童を捕へ
腕を引抜たり河童悲しみて云命を助け腕を返した
びなは血止骨接の妙術を傳へ又其里の産とさ永く
害する事あるまじと誓ひてなしたりけれは願に任せ腕
を返し血止を受取代々家に持傳へ資とせし○金瘡の血
止りかたき時嘉右衛門を招くに彼一物を懐中し来り
て席に着とひとしく血止りて多く者其物を取出して
に及ぶなん其形雙六石の如くまるく七八分斗りなる
その二つありいかなる物といふ事を不知当時の嘉
右衛門まて七代所持せりし

寺島氏云川太郎西國九州溪澗池川多有之狀如十
歳許小兒裸形能立行為人言髪毛短少頭巓凹可盛
一匊水毎棲水中夕陽多出河邊竊瓜茄圃穀性好相
撲見人則招請比之有健夫對之先俯仰搖頭乃川太
郎亦覆仰數回不知頭水流盡力竭仆矣如其頭有水
則力倍於勇士且其手肱能通脱左右滑利故不能如
之何也動則牛馬引入水灣自尻吮盡血也渉河人最
可慎
いにしへより語来せし故なるにや川なる男氏は菅原
相傳菅公在築紫時有所以詠之於今渡河人吟之則
無川太郎之患

山猱　妙高山焼山黒姫山皆高嶺にしてはるかなる方
山相連なり信州飯綱戸隠越中立山に至るまて数十

里に運ひけるに其深遠幽凄なることいふへうもなし
高田藩中数千家の薪は皆此山中より伐出すことにて
凡奉行より木挽杣の輩に至るまて各誓ひて同山小屋在
中以ての外怪事ありしも人に語る事なかりきとて一年或
山居せし後にありしは数日山小屋にありしか夜ハ人ゝ
打寄りて火を焚事絶へす炉をかこみてゐたりしに然るに山
男といふものいつも来りて焚火にあたりて一時ほとは
ゐけるに其形人に異なる事なし赤髪裸身灰
黒色にして長ケ六尺あまり腰に草木の葉をまとひ
小声にてものいふことなれとも声を出すに牛の鳴に
似たり又よく人の言語を聞きて相馴て知人のこと
し一夕或山氏にむかひて謂て曰汝木葉を著ても其恥を
隠すを知る火にあたるも寒きを凌く左候得者汝冬夏
ともなく裸身にして寒暑に堪ふることはあるは何
ぞ獣皮を取りて身に被りて防かんやと山男ほくそ笑て是を聞
て諾したる有さまにてされは翌夜忽ち羚羊（カモシヽ）二疋
を両手にさけて来り某山の前におきて某山其意を悟
り短刀を抜き其皮を取りて山男に与ふ山男悦ひまとひて
を開き打笑ひ悦ひ去るそれより二夜過て又小熊一ッ
兎一ッを持来りて小屋の中へ投入て去りしかはまた
又来る人ゝ是を見なし先の皮一枚ハ背を覆ひ藤を
以て繋き合せ一枚ハ腰に纏ふになしたし生皮を其儘着
たれは乾くに随てちゞみより彼熊張なり皆ゝ打笑ひ熊の
皮を取て文字なさす作て入小屋の軒に提て其製
しかたを教へ或山又山刀一丁を与へて帰らしむ其
後数日来らんとなかりし　高田大工又兵衛といふ者西

山本に雇はれあり夜急ぎ私用有りて獨り山路を帰りしに峠道の引廻りたる所にてたちまち大人に行逢たり其形裸身にして長ケ八尺斗髪を肩に垂れ目の光り星の如く手に兎一ツを引提ゲ静に歩み来り大工驚き立止れは彼大人も驚きたるさまにて立止りしか遂に物もいはす路を横切りて山に登り去りしと是等も彼山男なるへし

神異経云西方深山有人長丈餘袒身捕蝦蟹就人火炙食之名曰山猱其名自呼人犯之發寒熱蓋鬼魅耳惟畏爆竹煏熮聲〇幽明録云木客生南方山中頭面語言不全異人但手脚爪如鉤利居絶岩間死亦殯能與人交易而不見其形也海録碎事云嶺南有物一足反踵手足皆三指雄曰山丈(ヤマヲトコ)雌曰山姑(ヤマヒメ)能夜叩人門求

物也

狸樓閣　三島郡出雲崎寺泊あたりの浦洋春夏秋のころ空晴やかなる夕暮方海上遠に佐州渡島を眺望すれは青二ツ山の方にあたりて雲のやうにも霞のやうにもあらず黒色を帯たる気の立て或ハ城郭渡殿(ワタドノ)廊(ホソ)殿築墻石垣に至るまで彷彿として皆く全備して見へけり目さめしたるさまなく大蛤の気を吐て樓臺をなせりといふ類にや俗にこれを佐渡國二山といふ所に弾三郎といふ狸の栖をつくる所なりと申傳へて折節ありし　潜確類書曰蜃状似蛟龍有角有耳吐気成樓臺城郭　埤雅曰蜃気作樓臺将雨即見　禮月令孟冬之月雉入大水為蜃　鄭注云大蛤曰蜃　爾雅翼曰雀入淮為蛤雉入海為蜃　丸山云雉所化蜃大蛤也非下作樓臺之蜃上作樓臺蜃者龍類而本邦無之云く　時珍曰蜃与蛟唇之蜃同名異物　本綱集解曰車螯生海中能吐気為樓臺春夏依約島

淑常有蜃気時珍曰其殻色紫璀粲如斑點如花 車螯
吐気也不晴不陰之日夜間有蜃気船人為所惑矣
遲晴則為晴天速晴則為風雨西渡人謂之渡貝北
海人謂之狐之茂利太豆流俗以為奇怪者非也車
螯所吐之気也海上為樓臺謂之海市五雑俎曰蜃
海気也大凡海水精多結而成形散而成光凡海中
之物得其気久者皆能變幻不獨蜃也

因云越中奥津といふ所に毎年三月末より四月の間
に天気殊にのどやかなるときハ凪快り海上霞ミわた
りて一面の鏡を打くもらしが如き日蜃気樓を結
ぶなど一年一両度多き年ハ三度もありといへり土
俗これをきつねおやうし称せ

蛙合戦

昔日より何方にても蛙の闘ふ事ありて一時半時
の間戦ふ事ハ少からねバ奇ともせず然るに高田城下寺
町水田の辺にて寛延三年庚午夏四月三日より同六日
まで日数四日の間毎日数百万の蛙群集し左右に別れ
居て相戦ふに先大蛙声をたつると両方より小蛙一ツ宛飛出
て噛合深疵を蒙り疲労したると味方の蛙出来り脊
負又ハ抱て連帰る事十度斗り入替り出會て後に東
西の蛙入乱れ相戦ふ事おびたゞしく見る人市をなして
連るなりけりと奇しけれ凡不祥とて
因云難波戦記云慶長十九年十二月五日摂州住吉の
男山の辺にて蛙幾千万といふ数もなく集り南北に別
れて合戦する事半時斗り北の蛙打負て退散
せし其時東照神君の住吉の御本陣へ其事申上し
かゝる不珎事とて聞召し蛙冬ハ土中に蟄居したるに

堀出されたりとも手足不動時節に珍奇なる上意あり

大蝦蟇

松村家中の蕭士河内谷の溪流に鈎を垂るゝ事其常なる故に其座もさだまりし岩魁ふつきし木蔭流なしのよどみなれバいつれも各座をとりたる術となし居たり一日藤田某なるものこのつりの岩頭に至りて鈎をたれしも昼過る頃までも魚一つも得ざれバ方便(テダテ)をかへ川の浅瀬を渡り遥なる水上に登りて其宜しき所を尋るに山陰深く淵に臨んで立免らるゝに疣(イボ)立たる岩一つあり九畳三畳斗りも敷つべし即ち其上に座し鈎を垂しに又一人の士川向の岸に来りて鈎を垂けるや久しくして川向の士急に鈎竿を納めたりけるに向ひ手まねして早く帰られよと指し教ゆるものゝごとしいかなれバあるらんと妬しめきし川下へ逃去りぬ藤田氏も何か心淋しくなりて岸に上り元の道に帰り浅瀬を渡り其人に走り付て何事の候やと向ふに彼士大息をつきて貴丈ハ未だしらずや即ち公が座したる岩忽ち両眼を開き大なる口少しあけてあくびするさま海のごとく又眼を閉たり其眼中赤き事火のごとく光りて恐ろしなんどいふとうち成し是を見て蝮蛇(ハビ)ならんとて逃帰りぬ其後朋友相伴ふて其所に行て見しかどもさきの彼岩と覚しき物なしこれ是山中の大蝦蟇(カヘル)なるべし　抱朴子云蟾蜍(ヒキガヘル)千年頭上有角腹下丹書名曰肉芝能食山精人得食之可仙術家取用以起霧祈雨辟兵解縛今有技者聚蟾為戯能聴指使物性有霊於是可推　時珍曰蟾蜍土之精也上応月魄而性霊異穴土食蟲又伏山精制蜈蚣　玄中記云蟾蜍頭生角有食之寿千歳也

博物志に蝦蟇の三奇と出せり釋文に蝦蟇物を呑んとし
て口を開けば其気物を引来りておのづから口に入る
故にとらるといふ又密室に封ずといへども一夕にして
出て又千里の外に捨るといへども一夜のうちに帰り来るゆ
へにかへるといふ和訓ありといへり　王荊公字説曰俗言蝦蟇
懐土取置遠處一夕復還其所雖或遐之常慕而返故
名蝦蟇東垣食物本草及潜確類書等亦載此説故一
名曰懐土　元鈍曰蟾蜍眉間之白汁謂之蟾酥入人
目令人盲以紫草汁洗點消蟾蜍置地覆桶於上厭用磐石
明旦開視之唯空桶耳亦蟾蜍入海為眼張魚多見半
變　日本記曰應神帝十九年冬十月幸吉野宮
時國樔人来朝之中略夫國樔者為人甚淳朴也毎取
山菓食亦煮蝦蟇為上味名曰毛瀰云々然則本邦

亦上古食之

大蜥蜴(イモリ)　蒲原郡旭村より五泉の方へ越る所の山中に
三五郎池といふ小沼あり其池に長サ四尺斗りなる蜥蜴ありて
胴の周り二三歳の小児程に見ゆる夏日冬天静なる日
にあたりて水上に浮ひ出又論瀬村古河賀川に五尺斗り
なるあり日中に田間人なかりし頃密に堤の陰にひそかに
窺ひ見し時水に浮ひ出たり其背鉄黒にして頷の下朱の如
し里人もかしこで是を見し時は蝮蛇なりとし驚き病ぬ

大泥鰌(ドヂヤウ)　蒲原郡長峯村に池あり其池に長サ二尺餘ある
あり。つまき鰌栖めり是ハ耕作の用水を貯へ置くの八十餘間斗
りの溜池にて一年限りに秋冬の水を落し毎歳改むる日
に少し生長せる事実に池の名に應せるなく又守門
嶽の中に鰌池あり其に住む所の鰌三尺斗りもあ

り一尺ばかりなるもの甚だ多し然れども池中泥深くし
て人至れば皆隠れて少く取得ることを能はずといへり

螢合戦

蒲原郡大西庄見付町の後の山足三貫野と
いふ所に螢火甚だ多く五月の末の頃より宇治勢田
にも劣らず又同郡に五社といへる山里あり山川の
流れあまたにて信濃川近く流れ入る其川にも螢多く集り
て上下散乱し手鞠のごとくにして成て水中に落散りて
入梅後二三夜最盛んなりといふ風景言語に絶たれども
片鄙にして誰賞する事もなく一句の詠章なきは
此をしらう毎てりけり

佛法僧鳥

弥彦山の続き野積浦岩坂といへる幽谷
に佛法僧と鳴鳥の棲侍りしよし人皇九十九代後
光厳院御宇貞治の頃上総國山家村より出し弘智と
云行脚の僧此所に来り彼鳥の鳴をきゝし閑居の地
とトンさして終焉せし事見佛閣部に　又弥彦山戸瀬山の
東山足にもつくもの日静かなる時折節は鳴ことあり雄鶯
仏法々々と鳴けば雌鳥僧と鳴たりけるとなく
因云紀州高野山野州日光山奥州南部恐山にもあり
此鳥ありて鳴といへり

慈悲心鳥

蒲原郡瀧谷慈光寺の山に棲て慈悲々々心
ざししんしと鳴て雀より少し大にして尾長し
因云日光山中禅寺にも此鳥ありて鳴けるよし

大蠐螬（スクモムシ）

蒲原郡葛塚は七八十年前まで沼草原
多かりしを開発して今は人家数百軒田畑甚だ広潤
なり此里の辺畜太郎一日畑に出て草沼深く耕しけるに
に忽土中穴ありて何ことも知らずて居たりけるに海く

猶深く堀りて見れバ大サ小田原挑灯ほどなる蠐螬一ツまろ
ひ出てしを彼男鍬を以て其頭を打に金鉄のごとし仍て
吸居たる烟草の吹がらを彼虫の蟠れる所に落せしに
虫猶縮こまりて丸くなりしを又吹がらをしきりと数十落しけれバ終に
焼死たり然るに彼男の女子ありしが其夜より物の怪
付て驚かしき事数日終に奇病を發せし仍て僧を請し
法華を讀誦して其怪止ぬ禍患とこそいへども数百歳経し
の其死気妖怪となりたると覺ゆべし
本綱集解云蠐螬生河内平澤及人家積糞草中大
者如足大趾以背滚行時珍云其形如蠶而大身短
節促足長有毛生樹根及糞土中者外黄内黒生舊
茅屋上者外白内黯皆湿熱之気熏蒸而化

大蚯蚓（みゝず）

蒲原郡西川曾根の町裏に窪かなる池ノ塵
芥を捨て数十年掃除も用ひざりし一年六月淋雨して
むし暑き夜青白の光りあるもの其辺にありて色庭
廻りける人にあやしみ挑灯を照しあちこちして是を見
れバ長サ二尺餘の蚯蚓なりし 時珍曰蚓之行也引而後
申其塿如丘故名蚯蚓又如陰晴故有土龍龍子之名
其鳴長吟故曰歌女 崑崙云蚯蚓の吟ずる事和漢
の書に見えて歌女の称あり夏日淋雨晴んとする時
庭際溝瀆の辺に土中に吟じてその声清寥たり按ずる
に諸虫の吟ずるものは皆羽ありて其羽を鳴らして其声
を出せり又口舌ありて言句論じ何ぞ蚯蚓羽舌無
くして其吟をなさんや是思ふに螻蛄の吟をあや
まりて蚯蚓となすものならん蚯蚓螻蛄其居所相
同じ上古正愚の者土中に吟あるを探りて螻蛄

の早く迯去りたるをしらずて蚯蚓のあとに残せし
るを見て是とはせしなるらん
因云崑崙曰田螺鳴といふ事俳諧季節なれとも
み春の部に出し發句もあまた農俗よく是を
云早春雪消より耕耘の頃よりて田間常に其声
をきくといへども心を用ひされざるその何たる
のなる事をしらず過し春頸城郡に至りて
其聲を聞くにころ〳〵かふ〳〵の聲寂寞として
かの長安みな鼓吹するも恥さるが如し本草に田螺
蝸(クワ)蠃(ラ)の二品をあげ蝸蠃は蓋なし農俗云田螺
の蓋あるものみな能鳴といへり按るに田螺其聲を
なさぬのいはれなし即田の畦に出て静に立より
其聲に付て探り求むるに田蠃蝸蠃三ッ四ッを得

たり是を泥盤中に放ち庭前に置て試るに終夜鳴
て眠し翌夜又彼田畦に至て聞けど即聲あり重ね
て尋ね求むれども田螺なし杖を以てしきりに畦
を打ば忽ち土中より白青色なる小蛙一ッ飛出たり
俗に云石蛙也是を取て池中に放つに其夜忽ち声
ありて田疇に聞しに異なることなし　蚯蚓の説
相同し以可二一笑一云々又俗諺に河鹿(カジカ)土中に鳴時
は三年にして其堤崩るといへり河鹿其形鯰(ナマズ)魚
に似て小なる物一二寸大なる物四五寸に過ぎず其
聲鹿に似たるをもて河鹿といふ是又前の二説に類
して土臾の鳴く理あらそ其魚常に水上に浮し
も砂石に付て遊ぶ或ハ水中土穴に住む類あ
り又尾中針あるを人とさす然れども提の下な

と自然にうごきて水を含みし空所あるがゆへに尖臭集
りて其聲をなせるかいまだ其実否を試ざれば也

活石（イキ）

信濃川の辺り裏与野村社地に一ツの石あり大サ尺ばかり甚だ重く潔（漆カ）黒なり童部どもも戯れに其石を堀の内へ投入るに翌朝はもとの所へ上る幾度もするにかくの如し其堀泥水深くして只一人の力にてはなし取揚がたかりし所なり

這石

蒲原郡比曽村の山中に大石一ツありしがいつとなく這ひ出て山を横に下り今は北陸街道の傍にあり按ずるに急雨の節山水と共に押出せしと云へどもされども土俗這石といへるものなり

龍擅石

彌の奥黒ヶ嶽灌谷明神の社前に形ち卵のごとく大サ七尺餘の青黒なりしにて潤澤殊に常ならざる石あり祭時には近村の少年多く集りて力を競ひ争ふとて之を以て数十人して動し轉せる事例ありしに然るに過し年十月の頃一日雷雨暴風ありて大木を抜ぬき石壁を崩し一條の雲龍うづまき下りて彼社前の石を巻乾の方に飛去りしが半里斗り持行て大澤の中に落せり又翌年九月風雨夥しく起り彼大石を引上ヶ五六丁巻去りしが其山下修善寺といへる禅院の後ろに落ちて其響き山を動かし大雨水寺内に溢れ半時斗りなりしが平地一尺の水あり扨寺僧を始め村中の者共驚き集りて其石龍神の情ある所と覚へぬれども其地に置んも却て危きを待に似たり去りながら人力を以たやすく移すべき石にも非ず如何せんと咄しあへるに和尚の曰是は定めて龍擅なるべし

して只打砕きて捨るに甚むつかしと石工と呼る石脈を
たちて油をさし矢といへる物を入て終に是を破りしに
翌日数十人を催して打しかるに忽ち金石の砕く
る響きして両断したりしに其中央に少しき空所ありし
に小蛇四ツ蠢き出て堂されども是をも打殺さんとせし
を和尚引とめて溪流に放ち捨たり
五華山の中嶺出湯の奥に断崖数十丈の飛泉あ
り其上に龍の鍬堀といへる所四ヶ所にありて是も
数丈一壁の大石にして人力の及ぶ所にあらず古
より時ありて龍下りの所に下り猶深く其石を穿つ内
凹なる形自然に茶臼の如しいふなる故ありて龍の穴
工となせるや是等は童種石の類なるべし其近村旱
魃せる時は土民大勢其岸に登り小石を以て彼鍬堀

拋ち埋て下る時は忽ち大雨して其拋ちしたる小石を
悉く掃ひ去りぬるなりし」 瑯環記云水仙子有二一圓石
如レ卵一日風雨石忽破小虵出即呑二硯中水一既雲上
去

闘龍

蒲原郡信濃川邊江戸巻村の傍に池水あり
寛政三辛亥年八月朔日忽ち西北の風励しく吹来り
て一点の黒雲水面に落ると見へしが百雷一度に裏き
起て黒雲田野に満ち二ツなる龍火水上に戦ひ東に追ひ北
に返して回轉する事風車の如く霹電四方に言ふ先
きし其響き地軸を動しぬるが忽ち怪風左右に吹分き
暴雨盆を傾け其疾事百千の連弩を放つが如し拳の
大サなる氷塊を交へ飛ち一龍は東をさして稲麻をたち
きり村屋を散して栗林といへる里の下を過加茂の

山邉に添て登る一龍は信濃川を上りに三条の町端
を過堤の上なる土蔵を押し茶店を倒し南をさして
飛去りしが又半空より引返して山手の方を北に巡り
いづくともなく其至る所木をたおし総て行過る所
の村落田野大小となく人家草木の害あらざるはなし
殊に甚しきは栗林の前後にしてその餘二三里の交
なり

新巻水

寛斎曰寛政三年亥年八月十三日朝五ッ時新
潟を出船して池端の幽荘に帰らんとせし伴者一人乗
りおくれて後に船一丁ばかり引下りて来らぬ殊に晴
天一片の雲もなく風なかりしかば景色いふばかりなし湊口
は難なく打渡り沼垂の裏湾より新渠一里ばかり船子に
綱手引せて急ぎしかば忽ち海上二十丁あまりの雲起り

瞬の中に半天に覆ひ數條の雲引下り波上五六間ばかりな
りぬと覚ゆる頃頻りに雲尾轉じ白浪高く湧上り雲尾に接
せんと見えしが一條の白気黒雲の中に立登る事數十條な
り巻上られし水は半ばより断て落ぬ海上猶波湧て窪かなる
穴をなせるが如し白気雲中に入とおもはしく驟雨瀧を
峙つるがごとく咫尺の間も分たずして我船中忽ち水あふ
れ笠を出蓑をとをし乾く所は更になし漸く晴あが
りて後なる船はいかにと顧るに間もなく出来りぬ互に
其危きを語れども幾に後れたる船は一点の雨風
の強き事舟を中空に飛すが如くなりしとなん世に龍
の水を巻といふなるはなきにしもあらねど多くは水中の
龍雲を呼ひ水を引て上天するなりと覚えたり此日遠方に
て見たる人の物語なるは十三條の雲起下りたりといへ

つりされしも近くうちし故見しも雲数條の中只ハ一
條の大雲海上に近つき頻りに轉ちる時忽ち水中より
波湧海底裏きりうつるか如く一條の白気空を突て登
る然るに十三條引下りたるにより十三龍の水を巻に
きあふを水中の龍と云ふは雲を呼ふによりて引連
て数條の雲と相迎ると見へたり故に始め青空一
点の雲と浮ふ後如此の化をなせしとそ又曰寛政五癸
丑年十一月廿日新潟の津にまてんと寒風を凌きし
木崎なる茶店に立寄り便船やあるしと求るに折ふし
雨雪を凌く苫たるなきし小舟一ッ流れきて添ふよりて漕来
りぬ待しふけるに幸ひと便りを求め船中に簑なる敷
て座せると覚へしに忽ち阿賀の大江を横切つしり
新渠にまつ一里ほど漕行ぬ時まい七ッにも過されと

も風いよく励しく雪花もいう中にふりかくり遠境もたつて暮
るこの如し然所野守か苫屋一ッありて新潟へは猶一里々名
にありし八千餘流の落湊なる所海潮と河水と只ハ一片
の沙岸を隔つるのみ白浪天に漲り見るさへいとて物すさ
まじ折ふし舟子忽ち聲をあげあなくやと先たちしや龍
巻の来るなりとして舟底にまろひ伏しぬ時に海上岸近く
一陣の黒雲湫来るその疾きこと矢の如く勢ひ波を巻沙
を飛せ舟をも望んで突来り其間三間ばかりにて左りの方を
過るに雲百輪とまるくに似て爪一條にはしいて鉄車鉄の
ごとく川波忽ち二ッにさけて舟既にくつかへらんとせし
に横さまに吹飛ばしと石礫を抛つに似て覚へしを半丁も
かり退けらるる恐ろしさは此のことなかれ心をはげて雲
中を見しとも更に其形も見へずて只ハ雲中りごめきしわ

なり其頭と覚しき所呼吸のごとく火光ありて風と
共に後に打ちかくる一息ごとなり黒雲と共に其丈ケ
十丈にも過ぎたる其響き雷のごとく異さくさして行過
る所木を抜技ときさきし左右に吹飛ちて勢ひいとすさま
じし　凡此越ハ天下無双の水國なれも龍蛇の神
變折ふしあるゆへ海辺の人家にも屋上に鎌を立又田
間にも龍巻の節大勢打集りて手ン手ニ鍬鋤をもんと振
り廻し聲をたて其怪風を避るなり

登蛇

頸城郡松ノ山聖敬寺ハ古樹森々として晝くらく
庫裏ハ大澤に臨んて清水潭々としして夜明らかく
と世秋の末住僧来容と相對し閑談せし折ふし澤の
辺より小蛇長サ五六寸斗りなるが這ひ出庭上に登り其尾
纔か四五寸庭に付て直立し一聲細く吟ぜ容あやしみ
向ふに老僧すまし登天の蛇なりとて油断あるへからすとて寺
内の者共を呼ひ千ン物を取納め又は窓を覆へ戸
窓をとざせなどし又たちまちに一点の奇雲簷頭に顕はし水蛇
忽ちこゝをかしこかなしつてあつて暴風吹起り樹を倒し山
を動し蛟龍雲中に現し西に飛東に馳北に飜り南に巡
り縦横なる事数十度大雨いよいよ強く洪水澤に溢れ
暗きこと夜陰の如し朝五ッ時より暮七ッに至る迄戸を閉
く事能はず然るに空中忽ち一聲の響きありて山林
動揺しけるが風雨程なく晴わたりしがいつくとも所
其去りし所をしらざりき然るに三年過て春の頃樵丈深
山に入て大蛇の枯骨数丈なるを見たりしといへり俗
諺に曰登天の龍蛇人の肴に觸るゝ時は天帝是を毒
とといへり是等の事なりしやあらんかいぶかし

蒲原郡三条なる古城跡今猶残きしるそのハ内堀半ば埋
もれたれども泥深く水湛へて周りも尽く人家と過
し年の秋もや枯芦の生ひ出たるに荷残りたる間に
尺もありの青蛇一つ何となく彼芦に登り其尾を少し
枯葉の先に打まとひ頭高く仰ぎて口より大豆程なる
気を吐けるが忽ち鞠のごとく怪雲となりて彼青蛇をおほ
ひし煙りみなとく中空に立登りかししてあまし黒雲係に
うづ海をし起り暴風樹上を押し大雨ふりのをも乱れ彼
登蛇ハ北をさして飛去りぬし覚へしが夜に入てますます
いよ雷電し三日の間猶風雨止ざりけり凡是等の類
ましあるし　魯至剛云正月蛇與雉交生卵遇雷即入
土數丈為蛇形二三百年の能升騰卵不入土但為雉

両頭蛇

上越後の山邊にまであり長サ尺餘両頭前
後に行んと念發して空中を飛しかく人是に觸るゝ時ハ甚
ダ害をなせしと　本綱集解曰両頭蛇大如指一頭無口
目両頭共能行見之不吉故孫叔敖埋之恐後人見之必
死也

雙頭蛇

文政三庚辰年夏蒲原郡大久保村にてあり
長サ七八寸もありけるしるて二ツの頭を並べたる蛇ゝ里正某
是を携て御支配出雲崎陣屋へ至り其後普く人に見せ
しめしなり

角生蛇

享保十七子年五月下旬蒲原郡大面庄吉田
村の農民田圃にて或蛇の居たるのを見つけ鍬にて二ツ
に切殺し見れバ角二本生たり長サ一尺七八分もあり
目玉向ひ居よありて身の色黒く其丈ヶ二尺餘りの
蛇なり近邊の里人群集して見物せし

黒蛇　文化十二亥年六月下旬の夕方蒲原郡江浦
草田の里正ヶ居所囲堀溝の南岸染屋ヶ前に長サ六
七寸ばかりなる色黒き小蛇あり児童集りて是を捕へ半死
に至らしむ染屋の若代納涼に出し折ふし童部共を制
し彼蛇を竹竿の先にかけ溝の向へ投しにあやまり
て木の枝にかゝりしが須臾にして水中に落沈みし時
に童部共曰我等(ワレラ)が咎(トガ)を若代(アニ)に帰(ウツ)せりしと口々に罵りて
去りぬ然るに其翌日午時(ヒル)飯(メシ)の調度(タク)せんとし染屋の婦
女朝の汁鍋を洗はんとて粮米櫃の上に上ケ置しを
持下して其蓋を取しに小蛇一ツ鍋の中にわだかまり頭を
上にして死し居たり婦女ハ驚怖し家内の者を呼集
め是を改るに昨日水中に沈みし黒蛇也これ其怨念の
なせる所ヶ然れども外に何の災害なし予其時彼地に
ありてまのあたり是を見聞せり俗諺曰蛇の半殺(ナマゴロシ)ハ味
噌桶の中に入るといへるも違はざるにや一奇事也

千鳥貝　三島浦間瀬浦にあり其形徴郎君子(スガヒ)に似て
淡茶色淡白もあり細刻の縦筋あり小なるは五六分
大なるは一二寸尤其大なるはその化して千鳥となりて夕
暮方など殻の中より立出て行を浦人往々見し事
ありしとぞ他の濱にはあるを聞かず

國産之部

延喜式云凡諸國貢調庸有越後國限二明年
七月一 又云凡諸國年料雜物越後國零羊
角六具一 又云凡諸國年料供進越後國榧
子四合一 又云諸國貢蘇番次越後國十一
壺 四口各大一升 七口各小一升一 又云交易雜物越後國

商布一千端漆五斗檑子四合履料牛皮八枚石
以上税交易進」又云凡貢夏調絲青越後國中
絲」又云調輸錢越後國行程上三十四日下十七日洛路三十六日
調白絹十疋絹糸鮭庸白木韓櫃十合自餘輸狭
布鮭中男作物黄蘗三百斤布紙漆鮭内子並子
氷頭背腸」又云諸國例貢越後國甘葛煎」又
云諸國貢進菓子越後國甘葛煎一斤」又云越
後國年料楚割鮭八籠八十隻鮭児氷頭背腸各
四合麻笥別一升」又云諸國進年料雜藥越後
國七種細辛黄蘗各十斤僕奈二斤十三両茯苓
三斤蜀椒八斤零羊角三十具

小千谷縮

魚沼郡小千谷邊より織り出せしゆへ名とせり
何れの頃より製し始しにや古昔播州明石の人来
りて始めけるとも云ふ其苧麻（カラムシ）にて作り一反の掛目五六
十目より四十四五匁あるを最上とせし前には白柳條（シヾ）に
ありし紋所の織入斗りを作りしか近世に至り草木花鳥山
川村落の模様何にても好みに應せ作るを織し當國第
一の名産にしてなかなか他國にも比類なし其縮に用る
青苧同紅粉（ベニ）染にせる紅花共に羽州最上より毎年過分
に運送し交易せり地藍（ヂアヰ）もあつて縮に作りそれと性下
品ゆへに帯布（カヨミ）なとに用ゆ苧色としてのみに用ゆる紅入藍ともし
色染模様のあるは前方苧にて晒し織て後には五六月
晒せし凡縮を洗濯するには湯又灰汁を用ひず只清き
水に入浸し朝より午時（ヒル）迄日影の至る所に置て洗ふ
為し襟垢をおとし何にてもよく落るなり但垢の糞の
付たる者何としても脱しがたし

上千手〈小千谷より五六里山奥〉猶近辺の里々よりも多く出る事なかなかなり
縮は又別て毎年七月六日より同十二月迄縮市を立る其
賑甚しし妻有郡十日町〈上千手と信濃川を隔たり〉其中間縮多く交易し
諸方へ寄る事小千谷に越たり毎年四月より七月迄
京師武陽をはじめ諸國の商客常に入込みて繁昌
せり
堀内小出島等二ヶ所より白縮の名物は小千谷と四五里
隔上田出の縮は糸好くよろしく妻有出は糸柔かなるに劣
れりしかれども凡諸村の縮皆皺〈シボリ〉ありそれを小千谷にまとめ
張りのし畳み絆〈トヂ〉糸入相の押箱に入て諸方へ寄る故
て悉小千谷縮と称せらるるなり
右五ヶ所〈小千谷 上千手 十日町 堀内 小出島〉より製出せる縮の員数毎年凡
二十万端余 但運上銭上縮一端三十文下縮一端十文

和漢三才圖繪云凡布績〈レ〉紵不〈レ〉紡〈ツムガ〉而織曰〈二〉比良〈ビラ〉〈一〉紡而織曰〈二〉與刈〈ヨリ〉〈一〉累〈シキリ〉紡〈レ〉緯〈ヌキ〉織則為〈レ〉縮〈チヾミ〉出〈二〉於越後小千谷〈一〉為〈レ〉上防州
縮廻次兵播州明石豊州小倉出〈レ〉縮經〈タテ〉糸縮也雖美稍
弱

松山白布　頸城郡松の山家にて製り出せる苧麻布は
皺もなく極めて細き布にて雪に曝しいかにも純白に
て清鮮なるもみな雪に晒せるゆへに他國にはなき類
なし

小川苧　金引煮苧白苧の三品あり
蒲原郡出雲田庄に刈谷田川あり水源守門嶽の
麓杤尾ありそれより流れ出るゆへまづ杤尾川といふ
出雲田庄に至りて小川と称せり〈今町川ともいふ〉又今川を通りて又安川の
端通りに七十三ヶ村ありて其里々より作り出せるゆへ小

川苧と名付て春の土用に植蒔夏の土用に引取根を
切捨て日に乾し夜気にあたる時に出し夜晒しにして青色
の去りし時に茎の肥大に直なる上を金引とし茎の不
宜長きし上を貴苧とし其次を白苧とし各撰て品
定めをして製する事也金引を製る事塘堤の腹に
釜を仕入其上に桶輪を接接目より水のもらしめぬや
うに塞ぎ桶もちし土に埋もるくらゐにして扠水を汲
入麻苧の茎を入て火を焚煮るなり柔かになる時取
上て苧皮を剥き杠の屋根木羽の薄きにて長サ一尺
二三寸幅三寸斗りにしたるを二枚重ね前後を揃へて
鉄付苧板（板とも称す）を苧引藁なとの堅かりぬ上に置其板の上に
苧皮を乗せ長サ三寸余幅一寸七八分斗りの栖木に
長サ二寸余幅一寸五六分の鉄の板を打入て鏟の形

したるもの是を苧引をもつて苧の鹿皮を扱去るなり是
を苧を引といふ扱引たる苧四五筋斗り根の方二寸ふ
し紮ねにして一掛と称し竿或ハ縄にかけて乾し○貴苧ハ
茎を水に漬て取上ケ青草を刈て覆ひ蒸よくねせて
柔かになる時皮を剥取て釜に入是を煮て鹿皮を引
たるなり○白苧ハ茎に青草をかけ罨黄て水を灌きし柔
かならしむるに其侭剥引たるなり」 麻苧の種子を取る
に圃の端旋を引残し置に細花を開く是を櫻麻と
称し古哥にも詠まるゝ其花あるものに出実なし故
に花なきものを立置て種子を取るなり大麻火麻共に
子なし牡麻枲麻並に子あり俗に九月九日を麻の年
取といひて種子取し麻を十月青きうちに草を掩ひ
水を灌きし剥引しを青苧とし綱苧といふ」 凡夏秋

の間に製せるを古引といひ秋の末より後に製するを
新引と称せし綱苧畳苧瓲(ベ)粉苧筆結苧其等の用として
年々江戸京大坂へ運送せる所大抵二百五六十駄に麻苧
一束二貫目二十束一駄とし　右小川苧ハ多く今町より
交易せし國中の上苧にて其外所々村里より出るも夥し
白苧ハ保田より出る其の上品なり

栃尾紬　古志郡栃尾にて製せるにて紬糸太く節ありて縐(リウ)
紬(ミジ)にも似たれどもいたりて堅剛なり其の内島ヵ島といふ里に
て製せるの糸別して最上也○頸城郡糸魚川にて織を
糸魚川紬といふ下品なり

糸魚川紬　頸城郡糸魚川にて製せるに色白く清やか
ありて上品なり加州松ノ任紬(ツムギ)に似たり○同郡山の下
の里にて織出せるを山の下紬といふ色白く地弱

し○魚沼郡上田郷上州堺両山といふあたりの村里上樽
村なとにて製するを両山紬といふ佳品なり○同郡廣瀬
郷の村々大白川の邊にて製せるを廣瀬紬といふ糸
細くよわく少く弱し○古志郡栃尾の村々にて織出
せるを栃尾紬といふ黒色にて清やかなし下品にて糸も
弱し

藤布　蒲原郡加地庄轂岡村坂井村溝旦村あたり
にて織出せる所の葛布を云なり袴に製し上下とし又
蹴鞠袴としたるなり○頭注宝鑑曰藤衣とハ藤の皮にて
おりたる布にて近来素服とて用ゆ○藤衣ハ本朝古代
の喪服にて藤布なりしをいつしか貴者ハ服としかとし
葛布なと用ゆ是即ち藤衣と称せ葛布ハ和漢古来常
服にも用ゆるに古俗からしもをかしくてぬかしといふ故に葛

ともゐなりといへり河内国藤井寺も古来葛井寺とかけ
り又本邦古代麻布を薄染にして喪服とせしことぞ藤
衣といひしとぞ
因云遠州掛川にて織出せる葛布は鞠袴として奥州相
馬にて織る藤布を喪衣とせし本朝通鑑云享徳元
年二月義成（後改義政）授書於飛鳥井藤雅親證為歴朝
鞠道師範且禁加茂松下私例并田舎輩妄着葛
袴及沓（自今武将賜鞠證文於飛鳥井為例也）

鮭

信濃川の鮭を名物として就中蒲原郡庄瀬五反田
邊にて捕るをよしとせり長岡より新潟までの間川
水の潟をなる時又流れ急しの静なる間に捕るものを上とす新
潟まで也毎年七月廿七日より鮭網を引初る網の
長サ三丈幅一丈斗りあり俗傳云秋土用迄の間に信州

諏訪湖へ上る鮭あまたにし網の一乃箭を二ヶ目切て鮭の
通路とせし古実なりといへり 初鮭をとりつるしは多くは八
月捕へ雌を女なる雄をかなといふに大なる鮭の二貫目三貫
目位なるもの有しといふに一年三条近所にて六
貫目の鮭を捕り珍奇としたる處近来又古志郡三
宅村の向ありにて捕りしもの六貫七百目位なりし
と我古今未曾有なし 當國魚類多くある中に鮭に
限りて古来鮏といふ是為名誉乎
初鮭は長岡領主より献上く何方よりも初鮭を長岡へ
上しもの其賞として一番に城米七俵を賜る二番
に五俵三番に四俵なり一番を早打にて東武表へ御献
上なり則関東より禁裏へ捧げ半片供御に備られ其
半分又江戸表へ下り御城に於て御調味ある事古

例とすへき猶有職の人に尋ぬへし 文政武鑑云
長岡侯より献上八月初鮭二番鮭九月鮭麹漬十月子籠鮭
十一月鮭筋子十二月鮭塩引○村上侯より献上二月塩引鮭
九月初鮭寒中子籠鮭 ○新発田侯より献上九月
初鮭同二番十一月麹漬鮭子籠鮭寒中鮭筋子○村
松椎谷両侯より寒中塩引鮭 ○高田侯より十二月塩
引鮭献上せし 鮭塩引献上の諸侯はなし 國中の領
主太夫の諸役人皆新潟にて旅宿し是にて製する事最
厳重也 塩をもる事掛目壹貫目に塩一升の割合にて
桶又ハ箱の内に置二日を経て上を下に打返し塩
のむらを直し又二日を経都合五日目に消てなし塩
水にてよく洗ひ乾し風のゆく涼しき所に釣置ては
又遠きに寄せ夏を持越ものに塩ハ同事なしとて一

斤三日にて漬置都合七日目に出し乾し置べし 九月末に
鮭の子を産を俗にあかりにはくと云川の瀬のやうにはけ
めき深からざる所の沙を尾の先にて堀穿ち窪く成た
る所に雌鮭まづ子を産む其上に雄鮭来りて白子を
産かくる也頻てかくし固りて岩のごとくに成扨冬に至
り鮭皆川上へ登り信濃川にては妻有の奥そ瀧を限り
に上り大野川にては上田六日町近く明神岩を限り
に上り形衰へ色黒く枯木のごとく春三四月に至り去年産し
沙中の子生れて初ハ僅に一二寸月日を経て次第に生
長し秋に至り二尺四五寸三尺に及ぶは同し年鮭といふ
又も鱒とハ甚た異なべし 信濃川の鮭を本皮と称し名
産とす阿賀野川加治川荒川瀬波湊何れも多くあり
といへども川違ひと称し状も色も微し異り味甚た

為きしり塩引よしてハ猶不可之止　和名類聚鈔云崔禹
錫食経云鮏サケ 和名佐介今按俗用ニ鮭字ヲ非也鮏者鱖鯉属之一名也 其子似レ苺 苺子即覆盆也 赤
光一名年魚春生ノ年中ニ死故名之止　東鑑巻十四日建久五
甲寅年二月十四日佐々木三郎盛綱進ニ生鮏ヲ越後国所
領土産云々殊芳自愛云々一者被施ニ于只今祗候輩ニ云々
按するに盛綱居処蒲原郡加治川の鮏なるへし下去二
月に生鮏あることを覚束なし春の献上なれは塩引なるへ
し時日に違矢（失）あれもしや生鱒テスの書損か

大樫

蒲原郡河内谷里の宮に樫の大老樹あり一根
両俣にわかれ高サ十餘丈一股ハ朽過し年大風ありて
其一股を折る内朽て空なり是を材木商人に見せ
て賣んとす残（徹）頭まて然れとも數十人是を見て價を
定むることを能はす皆黙して去ル爰に三条町乃某なる
者其折たる一股の枝を買ふ價金十三両を以てせり其
枝の切口の径り一丈九尺五寸空の径り九尺杣木挽等
十餘人皆其空穴に住居して數日是を引分る其すへ
しれ所六間斗大きし物十挺其中なる所板幅五六尺
よしてく百枚其下なる所大春百七十二あり誠に未曾有
の大樹なりつし

因云柏崎鵜川明神の社内に樹是に次く囲り六丈
二尺五寸高田滝寺温泉のうへ毘沙門堂献大同九年の
大樫三根又是に次く但大樹古根の跡大なる物也
岩舟郡貝附狹川渡の下桂ヶ瀬の桂樹の古根径り六
間餘蒲原郡瀧谷の天狗杉根の径り二間三尺新發
田真野西聖籠観音の杉の古根又是に次く

珊瑚

頸城郡糸山の西三里に土底といへる濱あり其

沖六七里佐州小木の前の見渡しの海底数十尋の
下に少し小高き島あり則土底濱の漁人の鰈魚場に
て所に奇木奇石とて生ずる事甚だ多し赤珊瑚黒珊
瑚青白琅玕拂子石木賊石海松海柳等の黒珊瑚海松
の類きはめて多し実に交阯合浦ともいひつべき所
の漁舟の網にかゝりまたは根より引抜けてあがる物多し始
め水を出たる時は水垢ありて色も分らずして匂ひあしく
清水にさらしよく洗ひ日に乾して時は潤色光彩其
奇いふべからず又自然に大風波の為にちぎれ来りて
濱に打上げ砂石の内に拾ひ得たる物は殊に光沢絶
妙なり拂子石琅玕木賊石の類は稀にありしとも赤珊
瑚は今絶てなし十五六年前迄は数品ありしとも漁父の網
に懸りあがるといへども其奇物なることはなし皆海

底に打捨たり其折迄は稀に赤色なる物もありしとぞ
り近来好事の者漁翁の語を聞て舟毎に頼おくといへ
ども其求る人多きゆゑ得る事かたし○珊瑚淡紅色光
彩潤色根石付の所少し黒く其上淡緑次第に赤色へ
○青白琅玕光彩愛すべし石上に生ず○木賊石清白黒
節琅玕に似たり又一根数茎ありてそのさま玉林の如
し○黒珊瑚光沢潤色人を照す海松固色黒葉は樝に
似て少し青し○海柳葉細く長し拂子石一根数百茎を
生し長きものは二三尺短き物は四五寸大サ銀針の如
く白玉鮮潔の甚だし堅実ならずして折やすし机上の絶
玩なり●薩广貝といふ物あり玉石の類にて琅玕に似た
きもの光沢なく屈曲して其大なる物は二三尺水にある
時は淡紅色なれども日に曝せし時は淡白となる堅実なり

りロ塩凝といふものあり白色堅実にして象鉛石に
似て鹿肌大なるものは五六尺に総て珊瑚より以下皆
海中にあり中にやはらかにして玉石の類に非るが如し
水をもて乾くしまして即ち金石の如し

水飴

蒲原郡沼垂駅にあり九郎三郎といふものの製
する所名物とす領主より将軍家へ献上ある其外飴屋
多し求肥糖養命糖などに加る為上方筋へ多く運
送す近頃同郡曽根村飴屋五兵衛製するものは又佳味
にて京都二條家并領主長岡侯へ呈す

膠飴（ザヤウセン）

和漢三才圖會曰飴膠（ザヤウセン）以篺苞（タケノカハ）則汁不洩云々
蒲原郡漆山村にあり庄右エ門が製する所也其法糯米
二升を蒸して飯とし桶に入おきしに熱湯を二升入かき
き廻し蓋をして覆ひ茶二三服ほどの程過て蓋を取るに
湯皆飯に染入て尽したる時に麦牙の粉を二升加へてかき
き合せ蓋をして湯気を籠めやゝ久しくありて汁気
はなはだし色少しく黄ばみ飯ぞくはなはだしく時に麻布の袋に入て
壓して漉出す二番は右の糟の内へ熱湯を一斗入湯気
をこらめ頃刻にして袋に入漉出す又一番二番を一つに
合せ釜に入炊詰て練るに○煉たるもの堅くなりたるを
段引延し篠竹程の大さにして長さ二寸四五分に切たる
を棒餹（バウアン）といふ四時通用に賣買す○切飴とは棒飴よ
り少し異なるは小さき盥の如くなるに摘とりは入置
鑿の形なる又物にて切取笹の葉に包み児童の玩味と
す是は四月八日より十月八日迄商ひ他へも売さるを飴
街の作法なりとぞ近辺の村里飴を商ふ者は右庄左エ
門が弟子と成其傳授を得て神社佛閣其外のはかり

場へ出て館にて賣るなり
因て云近年香具師と商物の出入ニ及ひ江戸表へ出
訴して北ハ加治川より南高田迄古庄石衛門か支
配とし加治川より北ハ中條村五郎兵衛差配ニ御裁
断ありしとなし

雪苔菜　頸城郡名立山の麓笠島村の産にて國中の名物
とす　澳の岩ニ生するを岩海苔と称して二三尺方ニ漉
上ケ所氣ありて尤佳味なり　三島郡野積間瀬蒲原郡角海五
ケ浜ニて取物もよし　其外浦洋岩のある磯ニ生皆
生するも巖ニ雪の如ニ化りし所へ潮水打懸りたれとも
寒時ものにて頓ての目の前ニ苔菜となるなり

小國紙　刈羽郡小國保の山里村々ニて漉なり　一折四十枚
十折一束として盤の廣さ上下一尺より幅一尺三寸
ありしあり厚薄善悪品々あり　糊を入れて紙質堅し

大吉紙　前小國と同し小國紙の内ニて盤廣く厚く書
まゆかまして色白し　證文帳面等の書物ニ用ゆる上品
なり　若槻村ニて出紙を漉家二軒ありて貢とす

仙田紙　是も同前小國保の里々ニて漉なり　小國紙と
称する物と同様ニて上品なり

杤尾紙　古志郡高波庄杤尾の村里ニて漉　杤尾ハ高
一万石余ありて三十六ケ村の惣名なり　奉書紙ハ大抵越前
奉書の廣サニて極めて厚く肌粗し　○中折四十八
枚を一折とし十折一束也　上下九寸六七分横幅一尺二寸
糊入ニても虎文のある物あり　○鼻紙縦六寸幅八
寸一折五十枚を中ニて裁切り五ツニ合せて一束とし出す
○半切紙天地ゆるやかニ色白く厚し　○包紙上下一

尺餘幅二尺廾まて簾紙也

大谷内紙　蒲原郡下田郷大谷内村より漉之糊なし
厚く廣サ大高紙のことし桐油合羽荷拐油等油紙ニ
用ゆるによし

河内紙　同郡紙屋庄川内郷の山里より漉之五ト
廣杉原大抵伊豫杉原の如くにして厚く肌細密にて
よろしからず四十八枚一折とし一折一束也河内の外に
も東光院村五ト廣の最上也何れも貢となるもの
の中佳品也

伊豆ヶ原紙　同郡菅名庄戸倉村蒲原村より製して二
千枚より狭く幅の法まりたる紙也一折一束二百
枚也

和小紙（ナワラコ）　前同所邊より漉也信州の七九寸よりも狭し

加茂紙　同郡加茂町を始めて近辺の村里皆漉之二千枚紙
と称し其縦横西國より出る藏版紙の大サよりも一折二十
枚十折一束十束を一下丸として二千枚紙と名付たり糊
なし色も黒し狭口村（加茂より一里）より長福寺村よりも漉物ハ盤も
ゆるやかにて白く肌滑らかなるよし岩國版紙よりも劣ら
ぬ二千枚紙の最上也〇杉原紙も杉尾中折紙おなじく
まて糊入也〇五ト廣杉原紙も河内五ト廣の類也并尺
村川舟村よりも製して〇七九寸紙加茂七谷よりも漉て貢
す（す）るく黒水村槐村大谷村高柳村西山村長谷村土倉村鳥
越村の七ヶ村を七谷といふ

里蝋　何方とも村里にあり尤濱浦にも出なし刈羽
郡廣田村最上也古志郡長岡蒲原郡芝田磐舟郡村
上の領内より貢となるそのなかにも一の蝋と承と法実哉

印すして揚停き粉にし甑に置て蒸し扠山竹を以て作りし袋に入る其の内へ入大木に穴を穿ち其穴へ袋を入旁より轄(クサビ)を打込て搾り取りて二番三番をも取て色の黒き物を福王寺といふ星蠟は色白くして淡青を帯て艶よくねばりあり鬢付油を製する為に佳くし

和漢三才圖繪云木蠟ハ漆樹子也奥州會津之産為良越後村上羽州最上次之伊豫備前薩摩丹波阿波因幡等次之

山蠟

山に皆あり色少し黄ばみ粘なるもなし故に鬢付しをとせて蒲原郡見附を上とせて古志郡長岡藏納の分最よし山蠟の木よりも出る漆なし

漆

頸城郡刈羽郡にて夏の末より七月中迄にかきとる漆あしく軽く乾き品く艶よし刈羽郡廣田村の漆尤よし三島郡古志郡の村里にても多く時節遅く九月の末迄に取ゆへ第一足あしく乾きかね塗艶をろし霜降て後搔く物猶悪し但し晩く取物は掛目に洪(カサ)あるゆへ利の為に延引せり

五泉茶

蒲原郡菅名庄五泉村にて製せり國中の市場へ送り遠きは寄せ嫩葉を摘たるを不ゝつゝして尤よし○早摘為茶晩採為茗浴葉為荈茶

村上茶

磐舟郡小泉庄村上にて製せり是又國中處々へ送り遠くに運ひ出せ町茶と称せるとその上品は實茶といへるもの是次なり

○さる村雪車は来て請けてあり其状は長さ六七尺

雪車

三冬の末に至り雪積り駕輿の通用意に任せずかるみ木の先の反たるを二本柱わたし二尺五六寸の横木を四五ヶ處へ入て其上へ屋形をして澁紙桐油紙の

類なく包ミ風雪を防ぎし大綱を付ケ人夫を以て引く或ハ右の反たる木の木に駕を居てしも用ゆ又諸家の荷物并炭薪なとしみせて引く

○たり本字ハ
かりに字を
樏て掃とし
中に撥樏二物
にて

橇

雪の降り積りし時履て行く三種あり丸樏ハ縄を張り夫に緒を付て履く深雪往来人跡絶たる時の要具く　鼻樏是は前に云丸樏を少しいびつ形に作り先を反せしめたるものにて雪の山路を行に用ゆ　鶴樏長サ一尺三四寸幅一寸餘厚サ五六ト位の木を六本作り其真中五六寸の間をとぢしと編ミ月緒を立て履なり是ハ雪の堅りし時址を付て道を作るく所地を掃除目の如く見ゆるく又沼田の深きに早苗植るにも稲刈にも履くし　書経註云禹王治水乗ニ四載一益水乗レ船陸乗レ車泥乗レ輴ソリ山乗レ樏カンジキ輴以レ板作レ之其形如レ箕擿ニ行泥上一者也樏以レ鐵為レ之其形似レ錐長寸半施ニ之履下一以為レ上レ山不ニ蹉跌スベル一也　寺島氏曰如ニ越前北地雪深而不レ乗レ輴不レ能レ行不レ著レ樏不レ得レ上レ山南方人未ニ嘗見一者也

すかり

凡深山の里ゝ雪多く降たる時者樏を用ひても猶ぬかるゆへすかりといふ物を履て往返す其形窓骨の如く篙子カウシに作りて緒をさげて履く雪ヲ踏込み揚り兼るゆへ爪先に縄を付手に持て引ヒキ上ケ〱して行く

藁沓

雪中履アシダの歯の及ひ兼る時節に用ゆく稗一握り餘本トを束ね末を細に組て半より折曲てもく

銀

寛文延寶の頃八蓋山より掘出せしく奥州白峯銀山同代なりくし大湯村に建し制札等の事山形部に記せて昔日當國にて銀を吹し所ハ高田柏崎長岡芝田村上新潟なとにて吹出し是を灰吹といふ製せ銀を

灰の上に吹流し厚サ一分六七厘より二分までありけるを
かく上に極印をと打大小好ミ次第に切りて用ゆ中にも
新潟柾屋吹を最上とす是金銀吹後藤家よりて製法
伝来して如此所にて吹出せり創まりしられて金ハ慶
長年中一歩小判初まり元禄九年迄凡百年の間
通用ありて元金に改り銀も小玉豆板となり仍て吹
替の為銀子を江戸表へ送りしかなり以来當國に
銀の通用止りて金子と銭の通用となる其後安永九
年より二朱銀通用あり是を南鐐と称せし　菅子曰
山上有鉛其下有銀山上有銀其下有丹爾雅曰白
金謂之銀其美者曰鐐　丸山氏曰土石の中にも
ありて條しあり絲髪の形なるを是を老翁髪といふ
國俗銀の蔓と称せり

銅

蒲原郡石瀬村にて元禄年中其所を見立て掘せ
しに銅も少し出たりしかども未だ若きよし聞て止三島
郡野積村にても同じ頃掘りしに是も若くて止同
郡間瀬浦にて元文年中其所を見立て掘しに不足にて
止右三所共に弥彦山多宝山の内なり又文政二丁
夘年より野積間瀬両所にて猶又掘りしが尖度き銅
多く出今専らに掘出しぬ　本綱曰鶴頂新書云
銅與金銀同一根源也得紫陽之気而生緑緑二百年
而生石銅始生于中其気稟陽故質剛戻　菅子云上
有陵石下有赤銅　地鏡圖云山有慈石下有金若銅
草茎黄秀下有銅器　抱朴子云銅有牝牡在火中尚
赤時令童男童女以水灌之銅自分為両段凸起者
牡也凹下者牝也

鉛　奥沼郡廣瀬庄大白川の内より出る又正徳の
頃銀山ありても鉛をも掘しかとも深山嶮難の運送に物
入多く利なきしゆへ止む　本綱草青莖赤其下多鉛

水晶　蒲原河内谷の内篠堀の奥馬卸と称する山の
壁巖數十丈の岨の石に生ず白色ゝ指を双へたる如
くならく稜あり各六角其頭ぢ頭巾の如し　本綱時
珍曰水精亦頗黎之屬有二黒白二色一倭國多二水精一

木葉石　何方ともなく深山幽谷の溪川の水崖に諸木の
葉又ハ芭篠の葉落重なりたるに沙真沙と共に雪
に交り氷りたるか化して石と成たるものゝ奥沼郡
上田郷藪神庄羽根川入小出島の谷川の岸間の間と
谿へ秋の末へ嶺て雪み降る思ふ前に散積たる
る木葉と沙に交て幕にて掃入置に冬の間に氷

澥里懸り氷り合て石と成翌夏の初み頃取出し好む
方へ贈るなり

木石　何所ともなく深山の日影も見へぬ澗底陰湿の
地（土）に変化せし物と見へたり奥沼郡什なし川の上
左石の峯屏風ミと立たるときし岨に古老の大木峯よ
り峯迄生繁り実に日月の光りをも見さる峭谿に幾年
倒れ伏したる古木多く石に成たるあり然れとも枝梢
全く化しなるもぢ見へず又磐舟郡海府山にも有り○樽
まく石に化し立木のまゝに変化せしといへり
瑯瑘代酔曰松化為石

方解石（カンスイ）　奥沼古志蒲原の郡ゝの山乃深溪皆あり
積年の雪氷化して石と成其外面ぢ淡炉色に垢
付是を砕けば内ぢ潔白にて光りもあり細にして米

粒のごとし夏日の炎天に日面に終日置ても冷なること

不熟

石膏　蒲原郡下田郷芋川村の奥山より出る粟生嶽の
山足に青く粘る土ある所を掘る事底三尺斗りも沈て
てあり石も青色にして光りあり俗に土乃氷りにして石と成
なるものといへる

国立公文書館
National Archives of Japan